

大陸（北支）

蒙疆から河南へ（前編）

東京都 川村 傳

昭和十六（一九四一）年十二月八日、大東亜戦争開戦から一カ月の早く過ぎ去ったこと。繰り上げ卒業で学生生活に別れを告げ、身辺の整理もそこそこ昭和十七年一月八日に東京駅へ集合、東海道線で大阪へ向かいました。

市内の三国旅館に落ち着き、大阪城で小銃と帯剣を受領し、被服を支給されて四種混合の予防注射を受け、十三日夕刻大阪を出発、広島下車、宇品まで行軍、港で貨物船に乗船しました。船は船

倉の中心部が船底からハッチまで吹き抜けになっていて、周りは高さ一メートル半位に六、七段位の棚に仕切られ、数本の梯子で上がり降りする構造で、一番下には馬が積み込まれていました。換気が悪く乗船してすぐ気分が悪くなる兵もありました。

瀬戸内海から関門海峡を通る時一度用便のため梯子を何十段もよじ登って甲板へ上がって見えました。そこにはU字型に曲げたブリキの波板を何枚か継いで舷側に向かって傾斜させ、直径一〇センチもあるホースで船の中心から海水を勢い良く流し、両側の足場に跨いでロープにつかまり、その急流を股間に用を足すと言う具合です。甲板より約三十センチ足場は高いとはいえ船が

ピッチングする度に船首から被る波が甲板をドックと流れます。

冬の玄界灘で雪混じりの北風が強く、六隻の船団は波に揉まれながらジグザグ航海で、護衛の駆逐艦がその間を縫って走るのを見て、敵潜水艦出没の情報と考え合わせ、祖国と決別するという感慨よりも目の危機に対する緊張で興奮していました。そして『魚雷一発喰らったらどうなるのだろうか。旧式の嵩張ったカボックの救命胴衣をつけた数百人の兵隊が、数本の梯子へ殺到したら何人甲板へ出られるだろう。また運良く甲板へ出られとも一月の冷たい海水の中で何分生きられるか』等を考えると、ただ運を天に任せるより致し方ないと腹を据え、歩哨に小突かれて蚕棚のような船倉に戻りましたが、その間、激しいローリングとピッチングに耐えて航海の無事終了を祈っていました。

釜山に到着すると小学校の講堂へ收容され食事

を支給されました。予定や時間を一切知らされず、質問も許可されない。軍隊というところが、私の学生生活から社会生活へスタートした初の経験であったのでショックでもありました。年齢が同じとはいえ全然知らない人達とどう接したらよいのか。

大阪で身体検査を終わり、服を着ながら我々の仲間の一人が小さな音で口笛を吹いたのを居合わせた憲兵兵長に聞き咎められて、いきなり殴られ、上官の憲兵軍曹に「犯罪を構成しますか」と問うと、その下士官が勿体ぶった物腰で「態度不遜なりと認める」とやりとりしているのを見て驚きました。はじめて家族と離れ、どこへ連れて行かれるか不安な初年兵に、どうしてもっと軍隊の先輩らしく注意してやれないのだろうか、と思いました。

その時、私は以前読んだレマルクの『西部戦線異状なし』の中で、学生から志願でドイツ軍に入隊したパウルボイメル君が、同年兵の間で「郵便

馬車の馬」とあだ名された伍長の班長に底意地悪
いきたえに遇い、多感な少年から次第に環境と経
験と諦めで少しの事では驚かない古参兵に変わっ
て行く様を、十巻の「ショオペンハウエルよりも
磨いた一個の釘ボクシの方が値打ちがある」という価値
感の相違にまず驚き、憤慨し、その内にどうでも
よくなったとあるのを思い出しました。

釜山の小学校に一日収容されていた我々は、夜
になるとまた列車に乗せられ、一夜走り続け、明
け方に鴨緑江を渡り、その日の夕暮に奉天（瀋
陽）に到着しました。それから更に一日走って、
翌日の朝に山海関の国境で防寒外套はじめ防寒具
一式を渡されましたが、北京でも列車からは降ろ
されず、そのまま夜になると再び出発しました。
夜中にスイッチバックで八達嶺を越えて蒙古高原
をひたすら西へ西へと走りました。同行の下士官
から射撃の経験のある者は括包を二個渡され「敵
襲があったら俺について列車を降りるんだぞ、愚
図々々していると皆殺されっちまうぞ」と言わ

れ、いよいよ敵地に入ったのだと実感しました。

張家口でも平地泉でも降ろされず、遂に京包線
の終着駅「包頭」に到着したのは一月二十一日の
早朝でした。直ちに自動貨車に分乗、古参兵から
「今日は寒さが厳しいから居眠りなどしていると
凍傷で鼻でも耳でも落ちてしまうぞ」と脅かされ
ました。そして走り出すと砂漠のような所を走る
のですから居眠りどころではなく、頭に瘤ができ
ないように手足を突っ張って、ガタガタバウンド
する荷台の上で体を支えるのに精いっぱいでした。

大嶺で小休止の時、貨車から降りて用を足しな
がら彼方を眺めますと、六、七頭の駱駝が革紐で
鼻から鼻へ繋がれ、列車のように地平線へ向かっ
て行くのを氷点下三〇度に近い寒さの中で眺めて
「これはエライ所へ連れて来られてしまったもの
だ」とつくづく感じました。砂漠の真中に一キロ
四方、高さ約六メートルの土の城壁に囲まれた砦

の「安北」に夕刻到着、騎兵第十四連隊・第四中隊の第三小隊に入隊しました。

泥を固めた日乾煉瓦の六畳間位の室が数個並んだ棟が幾つかあり、内部の壁は古雑誌の壁紙が貼ってあり、室の床の片方が四〇センチ程高くなっていて、そこにはアンペラが敷いてありました。そしてその壁に面して寝具が畳んであり、その壁の棚には被服が小綺麗に重ねてありました。家具らしいものではなく、ダルマストーブと石油ランプが一個あるだけで、このなかでこれから何年も生活するのかと思うと何ともやり切れない思いがしました。

砂漠ですから水に不自由なのは当たり前です。水脈まで地下百メートル以上掘ってパイプを通し、圧縮空気を送って水を押し出すという方法です。そのため自動車の古エンジンで旧式なコンプレッサを回すのですから、コンプレッサオイルが水面に浮いて臭く、またその水自体が所謂硬水で、湯を沸かすと釜の内側が白くなるような水で

した。それでも一個小隊一日ドラム缶二本の貴重な水を牛車で運ぶのです。

一本でせいぜい一五〇リットル位のを二本で三〇〇リットル、これを頭割りにすると一人につき七、八リットルです。これで飲料水、三度の食事の食器洗い、洗濯までやらなければならぬ。外は黄塵万丈で演習や勤務から帰って来ると顔も手も洗わなければならない。初年兵などは含嗽(がんくそう)（うがい）に使った水を掌で受けて顔を洗うというような節水の努力をする。一方では水を大切にして緑化に貢献しようと、隊長の命令で食器を洗った水をポプラの苗にかけるなど、日課の合間に実行しました。戦後戦友会の企画で包頭へ旅行した人が、これらの大きく育った樹木を見て、現地の住民からも感謝されたと言っておりました。

当時の中国は中央の政府の力は弱く、各地に軍閥が勢力を張り、自分の地区から税金を集め軍隊を保有していました。その下には水生廉軍とか東

匪同盟軍とかいろいろの軍がありました。その中で日本軍に味方するグループを皇協部隊と呼んで、情報の収集や一部の地区の警備を委任したりする事などもありました。しかし彼らに見れば包頭周辺は第三十五軍の頭領、傅作儀の勢力範囲で、日本軍が進出して来た為に傅將軍は五原まで退いたが、しかしいつかまた戻って来るだろう、それまでは当面日本軍に協力して存在を確保しなければというのが本意だろうと思われました。

事実、我々が入隊して一カ月経つか経たない内に、東亜同盟軍の反乱が起こり、一部の將校が隊長の白鵬翔を暗殺して、その死体を五原に移動の途中、出動した我が部隊と交戦し、こちらも戦死者を出しました。その戦いで第三小隊の軽機関銃手の今井上等兵が戦死、一発で即死状態であったようです。そこで初めて私は屍衛兵をする事になりました。

六畳位の土壁の冷え切った室のアンペラ敷きの

床の上に、古い毛布で覆った遺体が横たわり、傍らには油の入った皿にボロ布の切れ端を纏った灯心がジジーと音を立て、初年兵の私が、防寒外套に帯剣姿で、その側に控えている有様は何とも寒々とした光景です。異国で散った先輩の不運を考えさせられました。翌日は城の南角の空地で中隊長以下全員整列で火葬にした事を思えば、後の作戦中丁重に申う余裕もなく、今なお現地に眠っている多くの戦友達に較べれば幸運だったといえましょう。

地の果てのような所で敵の第三十五軍と対峙していても、毎日の日課はビシビシと行われ、特に仮想敵国ソ連の縦深陣地攻撃の訓練では分隊単位で敵の弱点を衝いて、あたかも水が地表の低い所を這って流れて行くように、敵の攻撃し易い火点（トーチカ）から火点へと攻め込んで行く攻撃方法ですが、その攻撃方法の基礎としては匍匐する能力を習得しなければならぬとされ、支給され

た軍衣の肘と膝には当て布のバッチがしてありましたが毎日の演習は苦しいものでした。

頭は鉄帽で重く頸の筋肉が痛くなり、また砂漠といっても砂あり小石あり、黄土の堅くなった所があり、また地表に纏延^{てんえん}して菱のような棘のある実がなる草があります。その草の棘が掌や肘、膝に刺さり、そこから感染してフルンケルになる等のこともありました。これも余程悪くならなければ『練兵休』などはとれず、初年兵は苦しさ、痛さに耐えながら一期の検閲目指して毎日、分隊の戦闘訓練、射撃演習や銃剣術、歩哨の任務などの修得に励んだものでした。

私は訓練の苦しさを軽減するために装具の改善を考えることで憂き晴らしをしました。第一に訓練上一番邪魔になったのは三十年式銃剣です。長さも十センチ程長過ぎるしナイフとしても切れ味悪く、然も第二、第三匍匐では剣鞘が邪魔になって剣鞘を変形させてしまい修理に何度か出した憶えがあります。四四式騎銃のように銃に付けると

軽量になるし行動も自由になると考えました。

歩哨の一般守則（作戦要務令）は大変具体的にできていてこれを丸暗記して行動することができれば一人前に務まると思いました。

私は学校教練のない学校におりましたので幹部候補生の資格がなく一兵卒として入隊しました。前歴学生という事で「何故幹部候補生を志願しないのか」と何度も訊かれ、厭軍思想の持主と誤解されては叶わないから何でも真面目に一生懸命にやりました。古参兵や初年兵係の教官の若宮少尉は、昔の一年志願制で幹部になったとのことで人が人情の厚い将校で、我々初年兵のことを何かと気遣ってくれる人で、私のことも理解して貰えるようになりました。

北国の夜は長く寒く、午後四時には日が沈み、夜が明けるのは七時です。日夕点呼の後は消灯までランプの光で軍人勅諭をはじめ歩兵操典、作戦要務令、体操教範、射撃教範、剣術教範、軍隊内務令、陸軍刑法、陸軍懲罰令、衛生法、救急法等

の学科を勉強しました。私は入隊直前まで学生であり、国語漢文はもとより、英語、数学、物理、化学などをひと通り学び、世界史はH・G・ウェルズの『アウトライン・オブ・ヒストリー』を原書で学んでいましたから、これらの学課を理解するには苦労はなかったのですが、軍隊の所謂典範令なるものは文語体を用いてあります。

操典には綱領が巻頭にあり、曰く「軍の主とする所は戦闘なり故に百事戦闘を以て基準とすべし而して戦闘一般の目的は速やかに敵を圧倒殲滅して迅速に戦捷を獲得するにあり」などに始まってかなり抽象的な表現が多いのです。ですから小学校教育の卒業程度だけで社会に出た壮丁たちが果してどれ程これを理解できるかいささか疑問ではありましたが、実際には一般的にレベルはかなり高く、日本の義務教育の成果と日本人の資質に自信を持ちました。

ただ困ったことは一般の常識が通じないことでした。朝起床ラップで飛び起き、大急ぎで身支度

を整え、寝具を畳んで下士官室へ飛び込み、大きな声で「川村、床上げに参りました！」と直立不動の姿勢で言つて寝具に手を掛けようとすると、軍服を着ながらこちらをジロリと睨んだ軍曹が「貴様笑つとるな！ 不真面目な奴だ」と一喝されて面喰らいました。私はかねがね他人と接する時はいつも明るい笑顔でと教えられ、自分でも努力してきました。訓練中しかつめらしい儀式の最中ならいざ知らず、日常のしかも自分でやるのが当然のことを世話してくれる部下の兵隊に向かつて何たる言い草だと頭に血が昇る思いがしましたが、そこはぐっと我慢して大急ぎで寝具を片付け、点呼に駆け付けました。

このような常識の違いは言葉遣いにも多く、当時の兵隊の言葉には長州方面の方言が主体となっていたのではないかと思えます。語尾に「あります」をつけること、「いかが致しましょうか」と聞くのは「どうしたらよくありますか」であり、「ありがたいございます」は「ありがたいたくありま

す」であり、「よろしゅうございますか」は「よくありますか、悪くありませんか」でなければならぬ。「貴様達より下は豚と鶏だけだ」と言い、星一つ、金筋一本多ければ大層な身分の較差となる軍隊社会に馴れるまでには忍耐が必要でしたが、しかし、この経験は戦後、社会に出て大いに役立つものでした。

このようなことはとにかくストレスの蓄積になるのですが、ただ一つよい捌け口がありました、それは銃剣術でした。古参兵だろうが下士官だろうが、相手となれば思う存分突きまくることができたのでストレス解消には最上でした。

子供の頃から体格が劣り、力もなくスポーツに關してはコンプレックスを持っていました。強いとは学校の三年から剣道をやっていました。強いとはいえないが十年位のキャリアがあり、面金の中から相手を見ることには馴れているし、特に相手が双手（騎兵には片手軍刀術があるので普通の剣術

をこう言う）の場合は、手元に飛び込まれぬよう、また籠手を打たれないよう警戒して、木銃を下段に構え、相手が飛び込んで来る瞬間に剣尖を一尺程バツと上げると、相手は振りかぶり、振り下ろす二挙動であるのに対してこちらは一挙動だから面白いように突きが入るのです。上段に構えて飛び込んで来る相手には、下段のまま出足を払えばひっくり反るか脛を払われた痛さに二度と大胆な攻撃を仕掛けてこなくなりませぬ。しかし銃剣術同士ではこうはいきませぬ。中には実に強いのがいて舌を巻くような人もいました。

一期の検閲は皆一人前の兵隊と認められる関門なので緊張しました。私は戦場内の伝令をやり「言語明晰でよろしい」と誉められ、第四中隊で二人、それが二人共第三小隊であったので班長の田辺軍曹はとても喜んでくれました。

蒙古も五月ともなると春らしくなり、朝、城壁に立つと砂漠に幾つも蜃気楼の湖が見えたりし

て、寒さも和らぐにつれ軍隊生活にも馴れて来ました。同年兵も衛生兵、軽機関銃手、手榴弾筒手、装工兵、銃工兵などの修業が始まり、下士官候補生の志願をしたものは下士官候補者隊へ転属して行きました。私は下士官志願をすすめられましたが、職業軍人になる心積りは毛頭ないから断りました。しかし軍隊生活は真面目にやろうと決心していましたから、何でも積極的にやりました。

五月も末に近い頃、水汲みの使役兵に出て、揚水所からドラム缶に入った水を牛車で各小隊へ運ぶ途中、ドラム缶を丸太で二人で担いで運ぶ作業をやりました。一人百キロ近い荷重を担ぐので、担ぎ物で肩を鍛えてなかった私には無理でしたが、歯を食い縛ってどうにか耐えたのでした。が、歯を食い縛ってどうにか耐えたのでしたが、内務班に帰ってから日夕点呼の前に目の前が暗くなりしやがみ込んでしまいました。ちょうど脳貧血のような具合で、衛生兵に連れられて医務室へ行き、遠藤軍医大尉の診断を受け、翌日包頭陸軍

病院へ入院と決まりました。班長の田辺軍曹は大層残念がってくれました。診断は『右肺尖野縮小呼吸音疎裂打診音短切』というものでした。これは後で解ったことでしたが、この入院はどうも遠藤軍医の温情ある計いであつたらしい。糞真面目に働いて体をこわす初年兵を休養させるための入院であつたようです。

三カ月の入院で元気になった私は、安北に帰隊し、機関銃中隊所属の特別訓練隊へ入りました。これは健兵対策の一環で、連隊の退院した兵隊のリハビリ施設のようなものでした。各中隊から年次も様々の約二十人位の寄合世帯で、三人の下士官が監督し、兵舎も中隊よりは上等で、食事も一般より良く、牛の肝臓を味噌煮にした物などが支給されました。演習は行われず、体操とたまに銃剣術、相撲、球技などをやりました。

また中隊長の西村大尉の意向で射撃訓練と言っても射場に行くことはあまりなく、専ら射撃予行

で、照準線の指向に注意しながら引鉄を絞るような感覚で引き、撃針がカチッと作動するタイミングを掴む訓練でした。

射撃教範の「据銃ヲ為スト同時ニ引鉄ヲ第一段ヲ圧シ照準ヲ始メルト同時ニ引鉄ノ第二段ヲ圧シ照準完了ト同時ニ撃発セシメルモノトス」と記して有るようにはうまくいかない。また据銃から撃発までを六秒以内で行うのが命中率がよいときと、操典に「一回の躍進距離は五十米以内を可とす」とあるのは、伏せていた散兵が五十メートル躍進して伏せるまでに要する時間が約六秒と考えた。この射撃予行を始終やらされた。

予言と称して撃発した時に、照準線の指向した方向を上とか右とか呼唱してその要領を体得させる訓練でした。これは射撃上達に役立つ有効な訓練だと思し、射撃に自信があるということが戦場や危険地帯での任務遂行にいかにも勇気を与えるかを後で実感しました。

十月になって自動車の修業を命ぜられました。

私は中学時代に友達と五十銭宛出し合って練習場の車を一時間借り、交代で練習して十六歳の誕生日の翌日には小型免許を取得しました。そして学校でも実車について分解、結合、調整等を修得していましたので、トラックの運転は経験がなかったけれど、無経験の人とは格段の差があり、古参兵に混じっても中隊で一番の成績でした。ただ困ったのは構造や修理、調整の筆記試験の際に部品や工具の名称が自動車業界で通用していた名称（英語）は『敵性語』であると、難解な日本語を強制されたことです。

ハンドルはすべて『転把』、ペダルは『踐板』、ボルトは『螺桿』、ビスは『螺子』、ギアは『歯車』、クランクシャフトは『曲軸』、ボールベアリングは『玉軸承』、タイミングギアは『常時啮合歯車』、ラジエターは『放熱函』、インテイクマニフォルドは『吸入多岐管』と言ひ、また工具もハンマーは『入れ槌』、ドライバーは『柄付螺廻

し、ペンチは『断鋏器』、プライヤーは『自在歯鉗』、スイッチは『電路開閉器』、コンタクトポイントは『接触遮断器』となるから筆記試験は漢字の書取試験のようなもので、歴戦の古参兵殿もこれには大苦戦、初年兵の私が一位をとったのでさぞかし口惜しかったろうと思います。

十二月に二日間続けて盛大な軍旗祭が行われ、伝統ある騎兵第十四連隊は消滅、戦車第三師団機動歩兵第三連隊が誕生しました。私の所属は第五中隊の第一小隊となり一期の上等兵となりました。自動車中隊は一部は整備中隊となり、各中隊に自動車手として配属になる下士官、兵もいました。連隊砲中隊は四七ミリ対戦車砲と砲手が各中隊に配属され、中隊は自動貨車と装甲兵車の機動力を持つ機動歩兵となったのです。車種は不揃いで軍の制式車は『いすゞ』『ちよだ』でしたが『トヨタ』『日産』は代用車、それに民間から買い上げた『フォード』や『シボレー』のトラックと

指揮班の小型四輪駆動車は『くろがね』でした。対戦車砲は一式装甲兵車とフォードが牽引し、他の車は軽機関銃を含む一個分隊が分乗して行動するのですが、道路外の不整地で行動しなければならぬ時には、これらの普通道路用のトラックで果たして大丈夫だろうかとの疑問が湧きました。果たせるかな後に述べる河南作戦や老河口作戦に参加して故障に泣き、生命の危険を感じたものでした。特に足廻りの故障には本当に困りました。

戦車師団のトラックですと当然、燃料、食糧、弾薬の補給のため戦車と行動を共にできるような四輪駆動車や応急修理のための工作機械や部品を積んだ車等が必要です。また陣地構築や破壊された道路等の修理をするための土木機械等の装備も必要な事は言うまでもないことで、とくに戦闘という最も破壊的な状況に遭遇するのですから、補給と修理は不可欠の要素と思われたのですが、その点の装備は頗る貧弱でありました。

車の品質の問題では、トヨタのKB型、KC型のトラックの足廻りに就いては前後車軸のスプリングは日本発条ぜんまいの製品を使用していたと思います。が、材質が劣り、気温が零下二〇度以下になると脆くなります。このため約四トンの積載量で時速四十キロで走行中に、道路に長さ二メートル、深さ十センチ位の凹みに遭遇した場合、その凹み部分の発見が遅れてブレーキを踏みながらバウンドさせるような事があると、前車軸のリーフスプリングを折るといふ事故が発生します。

またオイルの粘度が温度により変化するので、冬は二〇番、夏は三〇番のオイルを用い、特に冬季無負荷でエンジンを高回転させるとメタル軸受けを溶かしエンジンを破損する危険さえありました。冬期はオイルが固まってエンジンの始動には始動電動機（セルフスターター）では無理なので手動クランクによりスタートさせます。その際逆転（所謂ケツチン）により腕の骨を折ったり、始動転把（クランクハンドル）に打たれて前歯を損

傷する兵士もあり、機関始動は冬季の危険な作業でした。

燃料の補給も注意すべきことで、ガソリンは凍らないから防寒作業衣の上へ誤ってこぼすとマイナス三〇度の寒気が直接皮膚へ侵入し凍傷になる恐れがあります。凍傷の恐ろしさは冬季の戦闘では最たるものです。夏の負傷なら軟部貫通銃創では、瓦斯ガス瘡疽血清と破傷風の血清でも注射して消毒しておけば、三週間も経てば肉も上がって回復するものですが、冬季は止血帯をしていたため凍傷になり、腕や脚の切断という重大な負傷となる場合が多く、凍傷による損害が倍にもなると恐れられました。

【解 説】

繰り上げ卒業で学生生活に別れを告げ、昭和十七年一月八日、東京駅集合、広島下車、宇品まで行軍、貨物船に乗船、船内は、蚕棚のごとし、船底には軍馬が、換気は殆ど無く、気分が悪くな

る。

冬の玄界灘は雪混じりの北風が強い、六隻の船団はジグザグ航海、護衛の駆逐艦が船団の護衛、潜水艦出没の情報を聞くにつけ、祖国との決別かと緊張する。

釜山到着、列車にて北上、スイッチバックで八達嶺を越え蒙古高原を西へ、実弾を渡され、いよいよ敵地に入ったと実感する。

張家口でも降ろされず「包頭」下車、いよいよ蒙古である。騎兵第十四連隊、第四中隊、第三小队に入隊。日乾煉瓦の六畳間位の室が兵舎であった。

包頭周辺は博作儀の勢力であるが、日本軍が進出したため五原まで退いているが、いつ戻ってくるか判らぬという敵情とのこと。

入隊一カ月経った頃、東亜同盟軍の反乱が起こり、我が部隊と交戦、今井上等兵戦死。私は屍衛として立哨、先輩の不運を考えさせられたが、毎日の訓練はビシビシと行われた。

軍隊の教科書とも言うべき操典には「軍の主とする所は戦闘にあり、故に百事戦闘を以って基準とすべし：」云々とあります。また、一般用語と軍隊用語との違いもあり、苦勞もしました。また「右肺呼吸音疎裂打診音短切」という病名で三カ月入院した経験もした。

十月になり自動車修業を命ぜられたが、一般自動車業界で使用語は「敵性語」として使えず、苦勞したものです。

十二月、騎兵第十四連隊は消滅し、戦車第三師団機動歩兵第三連隊が誕生しました。私の所属の第五中隊は整備中隊となり、各中隊に自動車手として配属になり、上等兵となりました。

連隊砲中隊は四七ミリ対戦車砲と砲手が各中隊に配属になりました。制式車は「いすず」「ちよだ」でしたが「トヨタ」「日産」は代用車、それに民間から買い上げた「フォード」「シボレー」のトラックと、指揮班の小型四輪駆動車は「くろがね」でした。

戦車砲は一式装甲兵車とフォードが牽引し、他の車は、軽機関銃を含む一個分隊が分乗して行動するのですが、道路外の不整地で行動しなければならぬ時には、これらの普通路用のトラックで果たして大丈夫だろうかとの疑問が湧きました。果たせるかな、後に述べる河南作戦や老河口作戦に参加して故障に泣き生命の危険を感じたものでした。特に足廻りの故障には本当に困りました。

戦車師団のトラックですと当然、燃料・食糧・弾薬の補給のため戦車と行動を共にできるように四輪駆動車や、応急修理のための工作機械や部品を積んだ車等が必要です。また陣地構築や破壊された道路等の修理をするための土木機械等の装備も必要なことは言うまでもないことで、とくに戦闘という最も破壊的な状況に遭遇するからですから、補給と修理は不可欠の要素と思われたのですが、その点の装備はすこぶる貧弱でありました。

車の品質の問題では、トヨタのKB型、KC型のトラックの足廻りについては前後車軸のスプリ

ングは日本発条の製品を使用していたと思いますが、材質が劣り、気温が零下二〇度以下になると脆くなります。このため、約四トンの積載量で時速四〇キロで走行中に、道路に長さ二メートル、深さ一〇センチ位の凹み部分の発見が遅れてブレーキを踏みながらバウンドさせるような事があると、前車軸のリーフスプリングを折るという事故が発生します。

またオイルの粘度が温度により変化するので、冬・夏オイルの変化したものを使うとか、機関始動は冬季の危険な作業でした。ガソリンを作業服にこぼすと寒気が直接皮膚に侵入し凍傷になり、腕や、脚の切断等、凍傷の損害も倍増する等の恐れがある。